発掘ニュース

第 15 号
昭和62 年 5 月18日
発行 財団法人 いわき市教育文化事業団

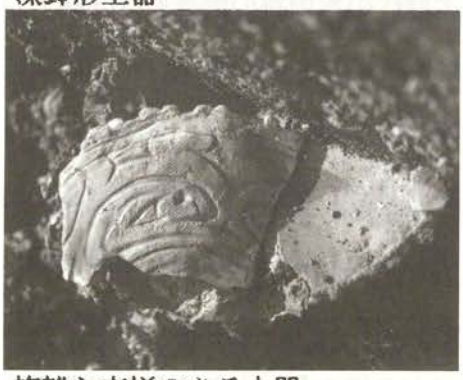
久世原館・番匠地遺跡（くせはらたて　ばんじょうち いせき）

今年の２月に県内で初めて発見された弥生時代の水田跡の調査もほぼ終了しました。調査の結果、水田を区画する大小の畔（あぜ）、給排水用の水路、水口（みなくち）、畔に沿って打たれた多数の杭、土器、石器などが見つかっています。また、焼けたコメも少なからず出土しています。今から約２０００年前、稲作文化がこの地にも伝わっていたことを証明したといえるでしょう。また、この水田跡を掘り下げるとより古い縄文土器が多量に出土することもわかりました。丘陵斜面に造られた平坦地からは古墳時代の竪穴住居跡が６棟も見つかりました。このようなことから来る５月２３日（土）午後２時より第２回目の一般公開を開催する予定です。市民多数のご来跡をお待ちしています。

弥生時代水田跡の発掘調査風景

とじておきましょう

深鉢形土器



複雑な文様のある土器

注ぎ口をもつ土器

土製のおもり

縄文人のくらし

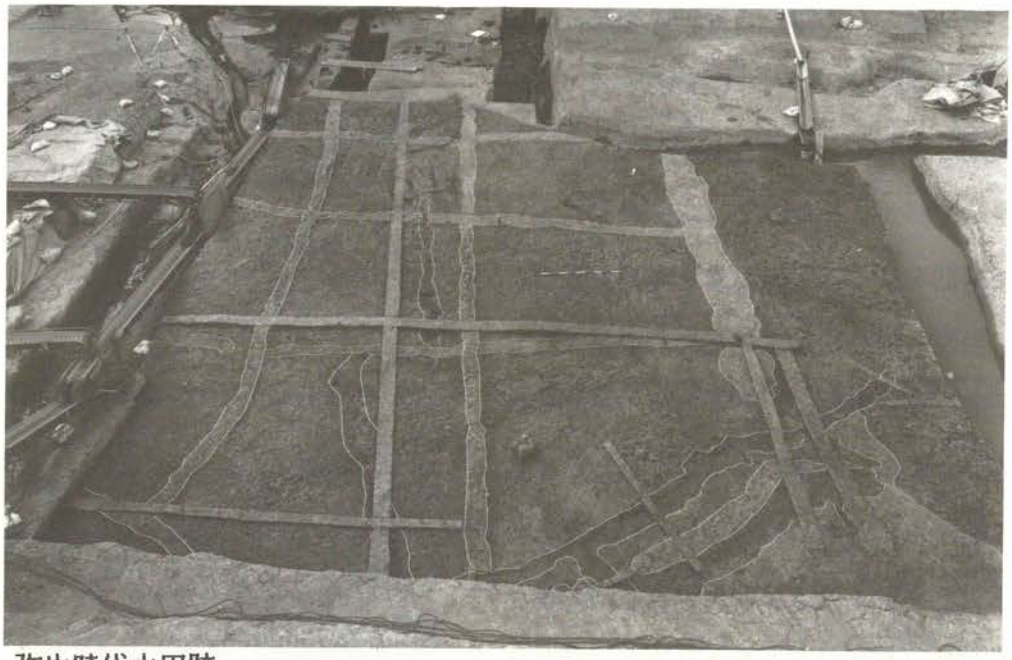
人々が動物を追い、魚をつかまえ、木の実を採りながら生活していた時代を、縄文時代（じょうもんじだい）といいます。内郷地区においては、この時代の資料はほとんど見つかっていませんでした。

今回の調査では、今の地表面から４ｍほど掘り下げたところ、縄文土器片がたくさん見つかりました。さらに掘り下げると土器片の量はよりいっそう増え、今は、約６ｍ下まで掘り下げています。

左の写真は、縄文土器の出土状況です。それぞれ描かれている文様が違うのがわかると思います。線を引いたり、区画をして磨いたり、また小さな粘土の粒をつけたりして、工夫をこらしながら土器を作りあげています。形は、深鉢形・浅鉢形・皿形などのほかに注口土器（ちゅうこうどき）（急須形）もみられます。

土器のほかにも、狩りの道具の石鏃（せきぞく）・漁網用（ぎょもう）と考えられる土錘（どすい）（おもり）も見つかりました。

現地にたって、みまやの地に住んでいた縄文人が、どんな生活をしていたか、想像してみてはいかがでしょうか。



弥生時代水田跡

米づくりの始まり

長い間続いた狩猟（しゅりょう）、漁撈（ぎょろう）、採集（さいしゅう）のみによる生活に別れを告げ、弥生時代（やよいじだい）（およそ２３００年前～１７００年前）になると、稲作が中国大陸より朝鮮半島を経て伝わり、新しい文化が生まれました。この文化を弥生文化といいます。弥生文化は、九州北部で発生し、南は薩南諸島、北は東北地方までおよびました。

弥生時代の水田跡は、全国各地で相次いで発見されていますが、東北地方では、青森県田舎館村垂柳遺跡（たれやなぎいせき）、宮城県仙台市富沢遺跡（とみざわいせき）、そして、この番匠地遺跡の３遺跡でしか見つかっていません。大変貴重な発見なのです。垂柳遺跡、富沢遺跡は、広い平野に立地し、一辺２～５ｍの少区画をもつ水田跡が多数発見されました。本遺跡の水田跡は、幅約１ｍの大きな畔（あぜ）による大区画、その中に幅約４０ｃｍの小さな畔による小区画で構成されています。小区画の大きさは、一辺３～６ｍで、形は、長方形をしています。それに伴う施設として、水路、水口（みなくち）、畔に並行する杭列も２ケ所で見つかっています。この水田跡の大きな特徴は、丘陵部の谷間を利用して耕作していることです。

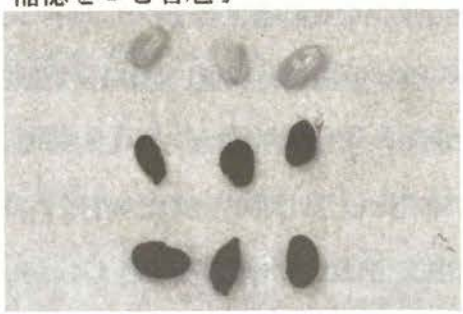
本遺跡の水田跡からは、弥生時代中頃（今から約２０００年前）の土器が多数出土しました。これらの土器の発見が大きなてがかりとなって、水田を営んでいた時期を知ることができました。

当時、稲を収穫するための道具として石庖丁（いしぼうちょう）が使われていたことはよく知られていますが、本遺跡からはていねいに磨きあげられたものが２点みつかりました。石庖丁をよく見ると使用された痕が残っており、当時の人々をより身近に感じさせてくれます。また、現在まで５０粒ほどのコメが見つかっていますが、調査が進めばさらにふえるものと思われます。

遠い昔、この地に息づいていた人々が今、長い眠りから覚め、私達の前に姿を現わしてくれたようにさえ感じられます。

土器につけられた文様

稲穂をつむ石庖丁



現代と弥生時代のコメ
（上段）（中・下段）

とじておきましょう

— 現地説明会のお知らせ —

開催日時　昭和６２年５月２３日（土）午後２時から

場　　所　久世原館・番匠地遺跡現地（いわき市内郷御厩町字番匠地地内）
　　現地事務所　ＴＥＬ０２４６（２６）５３８４

交　　通　ＪＲ平駅より内郷・湯本方面行きバスにて磐城一高前下車
　　徒歩５分（磐城一高より南西に４００ｍ）

編　集　財団法人いわき市教育文化事業団
　　いわき市平字堂根町１番地の４　いわき市文化センター５階
発　行　昭和６２年５月１８日